

宮本 輝「夢見通りの人々」(第九・十章) 論―物語の終わり―

宮本 輝「夢見通りの人々」(第九・十章) 論―物語の終わり―

藤 村 猛

要 旨

「夢見通りの人々」の九章と十章は、それまでの章を受けて、シリーズの世界の終わりを描いている。本稿では、春太の光子へのアプローチや竜一の刺青を巡る出来事、春太の美鈴と森との交流、そして別離などを通じて、彼らの思いや成長を、そして、〈夢見通り〉がどこにでもあり、人々はここで、または別の地で、それぞれに生きて行くことを論じた。

キーワード

〈夢見通り〉の世界、刺青、恋愛、男色、成長

一 はじめに

「夢見通りの人々」第九章（「波まくら」）と第十章（「洞窟の火」）は、それまでのシリーズの章を受けて、〈夢見通り〉の世界の一端の終わりを描いている。

具体的に言えば、第九章は、春太の光子へのアプローチや光子が竜一と別れて故郷の鳥取に帰ることや、竜一の刺青をめぐる春太たちの物語が展開する。

第十章は、春太とワンさんの娘・美鈴、そしてカメラ店の森雅久との出来事が中心となる。（それは、第一章に登場した美鈴や森の描写と照応している。）最後に、第八章で暗示された、スナック「シャレード」の閉店の日を迎え、作品（シリーズ）は終了する。

本稿では第九・十章で描かれた出来事を通じて、春太や竜一たちの思いや春太の成長を、そして、〈夢見通り〉とは如何なる世界だったのかを考える。

二 第九章「波まくら」——春太と竜一——

第九章は、タツミ精肉店の竜二の結婚式後の場面から始まる。

三月二十六日の土曜日、竜二の結婚式に招待されなかつた春太は、給料日の翌日ということで、一ヶ月に一度の贅沢として、太楼軒に餃子やエビの甘辛煮を食べに行った。そこには、結婚式に招待された店主のワンさんとパチンコ屋の吉武たちがいた。花嫁は「ほんまにべっぴんやったなア」⁽¹⁸⁹⁾という彼らの話は、徐々に悪口になっていく。

そやけど、相当、気がきつそうな目エしとつたで。一年もたたんうちに、ごつつい夫婦ゲンカをして別れるか、あの赤牛が骨を抜かれて、べつたり尻に敷かれるかのどつちかや。どや、

吉武はん、賭けよか⁽¹⁸⁹⁾

彼らの話は悪口で盛り上がっていたが、突然、「ガラスが破れるのではないかと思えるほどの勢いで戸があげられ」、新郎の兄の竜一が入ってくる。悪口を聞かれたかとみんなは狼狽する。だが、竜一は悪口を聞いていなかったのか、おだやかにみんなに挨拶して春太の隣に座る。彼は「いつになく精気が乏しく、そのくせ妙にこぎれいな顔で、何か考え事にひたっているように春太には感じられた。」⁽¹⁹¹⁾それは、竜一の恋愛の相手である光子の要望（「背中中の刺青を取ってほしい——第六章」）に応えるために、刺青をどうやって取ろうかと悩んでいたからであつた。竜一は春太に、半ば強引にフカヒレのスープをおごり、医者の友人はいないかと尋ねる。春太が

一人いると答えると、竜一はマツチの軸で「イレズミ」という文字を作り続け、春太が食べ終わると、コーヒーを飲み喫茶店に行こうと誘う。「医者」と「イレズミ」という言葉から、刺青に関することと推測できた春太であつたが、彼は今晚中に光子に渡したいものがあつた。そこで春太は「用事があるので一時間だけ」と答える。竜一は春太を連れて喫茶店に行き、しばらくして「本題をきりだ」⁽¹⁹⁴⁾す。

「この刺青を取ったら、俺の女房になつてもええつちゅう女がおるんや。ある人と相談したんやけど、消しゴムで消えるつちゅうもんでもないし、皮と肉をはがすしか方法はない。医者に相談しようつちゅうことになつて、おおかた四ヶ月近うになるかなア。そやけど、俺、病院によろ行かんねや」

「なんでです？」

「取られへんと言われるのが怖いんやなア」⁽¹⁹⁵⁾

竜一が四ヶ月も悩むのは、猪突猛進の彼のイメージとはそぐわない。それだけ背中中の刺青が重く、かつ、光子を大事に思っていたのだろう。

竜一の悩みを聞いて、人のいい春太はすぐに友人の医者に電話する。その友人は春太の話聞き、刺青が取れるかどうかは専門の形成外科医に聞いて返答するが、問題は刺青の範囲であると言う。刺青の大きさを聞かれた「竜一は苦衷の表情をあらわにさせた」⁽¹⁹⁶⁾。それを見た春太は、

人間というものは付き合つてみなければわからないと言うが、本当にそのとおりだな。春太は、黒牛と陰で呼ばれる辰巳

竜一に好意を抱き、ほのぼのとしてきた。(196)

これは春太の、ひいては竜一の人の良さを表していて、次の章で、春太が男色家の森の内面の良さを知ると似ている。⁽²⁾

大手術になるかもしれないと春太が言うと、竜一は「大手術で、長いこと苦しい思いをせんなん」としても、「やつぱり、取りたいなア」(196)と答える。そうしないと、(光子は)「俺の女房になつてくれへんねやから」と言い、春太は、彼の刺青が「形成外科の手術で取り除かれるのを、あたかも自分のことのように願った」(197)。この時点では、春太は竜一の相手が光子であることを知らないため、竜一の願いを叶えたいと思っている。

三 春太の思い

竜一と別れた春太は下宿に戻り、「勇気をふるいおこして」(197)、隣家の光子に海の音が録音されたカセットテープを渡す。それは、光子が「いなかの海の音が懐かしい」(198)と言っていたからだだが、問題は二人の会話が半年前のものだということである。渡された光子は半年も前のことであり、啞然としたのではないか。そんなことも分からない春太はテープを渡した後、「心が昂ぶ」(197)つてくる。

光子にプレゼントしたのと同じカセット・テープのセロファンによる包装をはがし、春太は将来に向かって本気で進み出す方法を模索した。なんとあいまいにきょうまで生きてきたことか。何の為に働き、何の為に飯を食い、何の為に数百篇の下手

くそな詩を書いてきたのだろう。善良なだけでは何も成せない。この廃屋に等しい若菜かまぼこ店の二階に借りた部屋のつましさはどうだろう。(中略)まさにこの自分を象徴している。冒険心に欠け、気宇壮大な部分はひとかけらも持たず、世の中の規範を守ることが生きることだと思っている。小さな巢にこもり、覗き穴から他者を眺め、侵入者に怯えて入口をかすかにしか開かない。そうであるかぎり、自分は一步も前進することは出来ない。前進しなければならぬ。自分は人間なのだから、前進しなければならぬのだ。(199)

確かに、春太に若者特有の冒険心が欠けているとしても、彼が巢(かまぼこ店の二階)にこもり、侵入者に怯えているとは思えない。彼は他者の悲しみに心動かす優しい青年であり、平凡ではあっても夢見通りの住人たちは彼を頼りにしている。(ただ、光子に半年遅れのプレゼントを渡すように、ずれている所はある。)

また、彼が望む「自分の幸福と他者の幸福との共存」(200)は、彼の考え―「理想共産主義」的な考え―に従えば難しいことで、その方法は「夢にも知らない深い深い場所で見つけるしかない」(200)のかもしれない。しかしそんなに考えずとも、人間や社会は動いていくのであって、彼が何かをしなければ何も始まらないのである。

かつ、彼は「詩を捨てることが出来ない」。彼にとって、詩を作ることは生きることであり、生きることによって、彼は詩を作るのである。彼は「善良なだけでは何も成せない」と思っているが、彼は懸命に生きてきて、詩作に励んでいる。

彼はその後、「変質者」云々という詩を自分の詩集に入れるべきかで迷う。だが、その詩が「ひとりよがりなものであるのが稚拙なものであるが、この詩をこのようにしか書けなかったということこそが、詩集を作る理由であり目的なのだ」(202) と思い至る。このとき詩は、彼に取って生きる証となっている。

だが、彼のもう一つの夢である光子は、優柔不断な春太に好意は持っていない、彼に恋心を持っていない。そのため、春太から渡されたテープの取り扱いに困った彼女は、「悪女のふり」(209) をして、テープをすぐに竜一に渡す。

四 春太と竜一

「シャレード」で竜一と再会した春太は、竜一が持っているカセットテープに気づく。「刺青を取ったら女房になってもええっちゅう」(203) 女(光子) から渡されたと聞いた春太は、竜一と光子の関係を知り、竜一が自分の恋敵だと気づき動揺する。

春太は竜一の依頼で友人の医者へ電話し、刺青を取るのには可能だと聞かされるが、竜一には「取られへんそうです」(203) と嘘を言う。ここには竜一への悪意がある。(竜一が刺青を取らない限り、光子との結婚はない。)

それを聞いた竜一は「激情をこらえ」、春太と問答した後「深くうなだれ、やがて気味悪いほど静かな口調と表情」(204) になる。春太は「自分の嘘に、いっそう信憑性をもたらし」として、手術に失敗したら命にかかわるとまで脅す。彼は「自分の心が少しずつ

残忍性を帯びていくのに気づく」とともに、このまま嘘をつき通すと、彼の作った詩は「彼(春太)」を表したものではなくなる。つまり、嘘を突き通したままでは、今まで生きてきた自分自身を失い、作ってきた詩が彼自身を表すものではなくなり、その結果、「自分の詩がことごとく贋物であったこと」になる。そのことを彼は混乱を経て、「冷静に理解」(205) するようになる。

春太は耐えられなくなり、竜一になぜ自分に相談したのかと聞く。すると、竜一は「里見はんやったら親身になってくれそうなのがしたんや。」(205) と言い、再度の竜一の依頼「もう一度医者に聞いてくれ」に、春太は「全身が鳥肌立」ち、「涙を抑えられなくな」(206) る。

竜一に「その女の人は、三年でも五年でも待つてくれるんですか?」と聞くと、「わからん。たぶん待つてくれへんやろ。いや、待つてくれるかもしれへん。とにかく俺は刺青を取る。」(206) との返事を聞いて、春太は涙を流し続ける。「なんで泣いてんねや?」の竜一の問いに、

「ぼくは、自分が嘘つきやったらええのになアと思たんです。取れるかもしれへん……。そう嘘をつけなんだ自分をひどい人間やと思たんです」(207)

ここに、春太の本音と苦悩があらう。彼は信頼された相手が恋敵だとしても、嘘がつけない。彼の良心は嘘を許さないし、自分を信頼してくれる人間を裏切れない。(もともと表面上は、自分の嘘をごまかそうとしているが。)

竜一に自分の部屋で待つように春太は言い、医者への問い合わせ

のふりをするため、地下鉄の駅まで行き時間つぶしをする。だが、光子に渡したテープと同じものが自分の部屋にあることに気づき、下宿に駆け戻る。幸い、竜一はテープに気づいていなかった。「春太は観念した罪人みたいな心を隠して、竜一に手を差しのべ、握手をした」(207)。そして、彼に医者言葉として、刺青は「たぶん取れるやろう」と伝える。それを聞いた竜一は、春太に感謝する。

竜一はゆっくりと春太の前に正座し、両手を突いて頭を下
げ、

「里見はん、俺、一生、あんたの友だちや。あんたはいやや
と言うても、俺は一生、あんたの友だちやで。里見はんをいじ
めるやつは、俺が許さへん。あんたが一生、俺を裏切りつづけ
ても、俺は裏切れへん」

と嗚咽しながら、悲痛な声で言った。(208)

竜一は、春太の好意に感謝する。ひよっとすると、彼は春太の光
子への恋心を知っていたのかもしれない。「あんたが一生、俺を裏
切りつづけても、俺は裏切れへん」あたりに、それが込められてい
る⁽³⁾感もある。

その後、二人は「ともに眠れない夜をすご」(208)す。同様に、
隣家の光子も眠らずに苦悩していた。

五 光子の悩みと決心

光子は美容師免許状を得て、竜一たちに黙って故郷(鳥取)に帰
り、竜一には故郷から手紙を出そうと思っていた。実は、第六章に

描かれた彼女の告白(「刺青を取って下さい」)から四ヶ月が過ぎ
て、彼女は「竜一に好意を抱いたことが、自分の真実の心の働きで
あったのかどうかさえ、判別しかね」(209)ていたのである。彼女
は、次のように思う。

自分は平凡を欲し、平凡の中でしか澁刺と生きることの出来
ない女なのだ。そんな自分には、竜一は荷が重すぎる。漠然と
考え始め、次第に確固たる結論に達するまで四ヶ月近くもかか
った。(209)

それは冷静な判断であるが、それでは四ヶ月前の彼女の思いは何
だったのか。彼女の気持ちに冷めたのは、やはり、四ヶ月もの空白
のせいではないか。その間、竜一は光子に何もしなかったようであ
る。そうであれば、彼女が迷い、別れを決断しても無理はない。同
じことが、春太にも言える。

そして光子は、里見春太が自分に好意を持っていたことを知
ことを一年半も前から知っていた。平凡を欲するが、里見春太
の優柔不断さは、娘心には地味すぎた。(209)

二人の「優柔不断さ」が光子を離れさせた。まさに第一章でカメ
ラ店主の森が言うように、そして、第三章で時計屋の哲太郎が理恵
にしたような直接的な行動が必要だったのかもしれない。

光子は「夜が明けるまで、まんじりともせず、竜一のことを考え
つづけ」、「重いトランクをさげて階下の美容室に降りたとき」、「す
ばらしい名言を思いつき」、「うっとり酔うように胸の内ですばや」
(209)く。「理由もなく裏切っても許されるのが女の特権だ」(209)
と。だが、これで彼女自身が納得できたとしたら、彼女はかなり追

いつめられていたか、底の浅い女性であるかだろう。

後日、光子は竜一に手紙を出す（第十章）。その文面を見せてもらった春太は、「光子の嘘と本心とを読み取」（212）る。「どうか私を許して下さい」というのは本心だが、「ほんとに竜一さんを好きになりました」や、「母は、私が美容師の免許を取得して帰ってくることを楽しみに働きつけてきました」（213）は嘘であろう。だから、春太は「みっちゃん、魔がさしたんやなア……」（213）と思ったのではないか。（春太は彼女の嘘を見抜き、許している。）

臆病な光子は人生に「平凡」を求めている、それは天性に近いものだろう。同じように、宿命の如きものを与えられた人間として、男色家のカメラ店主の森雅久がいる。

六 森と春太―第十章「洞窟の火」―

森は男色家である。それは他人から教えられたというよりも、自分の本質（男色）に「目醒めさせられた」（223）というのが正しいのかもしれない。美鈴の友人の彼（レスリー）もそうであった。彼は森と出会うことで、森曰く「全身が女に、さあーつと変わった」のである。それは宿命の如きものであり、痣を与えられた奈津に近いのかもしれない。（もちろん、森やレスリーの男色は彼らの選択の結果であって、奈津の痣のように先天的に与えられたものではない。）

春太は森を男色家として恐れていたが、森と様々な話をして、彼に「圧倒的な知識とその感性豊かな咀嚼力」（226）があることが分

かる。かつ、春太の善意に涙する優しさも持っている。だが、春太や美鈴たちの男色への偏見は強い。若い美鈴は、「ホモセクシュアルを、べつに異常とは思いませんけど。正常でもないけど」（218）と言う。春太は森の欲望に対して、「……地獄ですね」と言い、森も「レスリーは、もうどつぶりつかつてしまった。俺もそうや。もう、つかつてしもたんや」（226）と言う。ここには、世間への反発とともに、自嘲の感がある。⁽⁶⁾

森は春太に男色の対象ではなく、「人間と人間のつきあい」（224）を求めている。そして、孤独な春太も「たとえ森雅久が、（中略）地獄にひたつた男色家であろうとも、春太は彼と（人間と人間のつきあい）を、それもかつて得られなかった深い人間同士のつきあいをしたいと思う」（230）ようになる。

だが、彼は夜の妄想の中で「きまつてあらわれる女と、そろそろ決別しなければならぬと思」（230）う。（この女は、春太の欲望の象徴である。）

そうでなければ、いつしか（人間と人間のつきあい）にかこつけて、あの暗室の赤いランプ⁽⁷⁾に溶け込んで行きかねないのだから。（230）

春太は、森の誘いに乗るかもしれない自分の「欲望」を危惧している。そのせいもあってか、彼は詩集出版のために貯めていた金で、マンションを借りて、離れていた母と暮らそうとする。それは森と距離を置くことであり、〈夢見通り〉からの別離をも意味している。

春太が今後どうなるか、作品では語られない。だが作品最終部―

シャレードの閉店パーティの夜—において、自室から春太の見つめる竜一とげえやんが、次のように描かれる。

二人の姿は夢見通りの入口近くで黒い輪郭だけになったが、雨に濡れたアスファルトには、男とも女とも判別できない人間の影が落ち、光って、もつれて、揺れ動いた。(232)

あいまいにして光り揺れ動く姿に、春太たちの未来が込められている感がある。「夢見通りの人々」の冒頭部も夜の場面だったが、それと比べると、「黒い輪郭」や「判別できない」影があるものの、「光って、もつれて、揺れ動く」最終場面の方が明るさがある。

以上のように、第九章・十章には春太たちの成長や生が、彼らの悲しみや欲望を内包しつつ描かれている。考えてみれば、〈夢見通り〉とは、彼らの孤独を引き受ける場であり、狡さや弱さを持ちつつも、日々を精一杯に送っている人間たちの世界であろう。つまり、作者・宮本輝が影響を受けた「ワイズバーク・オハイオ」(アンダーソン)に描かれた「グロテスク」さほどではないが、〈夢見通り〉の住民たちは、自分たちに与えられた性癖や宿命に押し流されつつも、懸命に生きている。そして、安藤始氏が言うように、彼らは「それぞれが利己主義のようでありながら、通り全体のバランスの中で生きて」⁽⁸⁾いるのである。〈夢見通り〉から離れる春太や光子、そして、奈津にしても、時として反発・孤立するが、住民たちの中で成長していく。特に、春太は夢見通りにやって来て、成長して去っていく。

春太は〈夢見通り〉から卒業していくと言うと、言い過ぎかもしれない。彼は別の地でも真摯に生きて、悩みながらも成長していく

だろう。なぜならば、〈夢見通り〉はどこにでも存在し、⁽⁹⁾その住民たちはどこにでもいると思われるからである。

つまり、光子や春太、そして「シャレード」のママたちの離脱⁽¹⁰⁾により、作品〈夢見通りの人々〉の世界は終わりを告げるが、人々は〈夢見通り〉で、もしくは別の地で生きていく。

「夢見通りの人々」第九・十章は、そういう意味で連続性を持ちながらも、シリーズとしての作品世界の終了を告げている。そして、宮本文学にとつて、作者とは距離を持つ人間や空間〈夢見通り〉の創造という点において、意義のあるシリーズであったと言える。

(注)

(1) 本文の引用は、『宮本輝全集』6(新潮社 1993・9)による。()内の数字は、全集のページ数である。

(2) 〈夢見通りの人々〉は、大体そうなのではないか。章によって濃淡はあるが、一見、どうしようもない人間に見えても、内面には人間らしい弱さや悲しみを持っている。

(3) 一章で森が春太に言う、「惚れてること、まるわかりやがな。」(24)というセリフから、春太の光子への恋心はみんなが知っていたのではと思われる。

(4) 第六章で光子の「性」に関して、次のように紹介されている。彼女はまだ生娘であったが、その二十一歳の肉体は、性への期待と憧れを、ゆるやかな潮の満ち干のように繰り返した。(133)

竜一や春太の(恋愛に関しての)行動のなさが、彼女の恋心を冷ました、または恋心を生じさせなかったのだらう。

(5) このセリフは、かつて光子が宝石箱を猫ばばしたとき、竜一が「誰でも、魔がさすことがあるわ」(130)と慰めるのと似ている。光子の罪を許す竜一や春太の優しさを表しているよう。

(6) この小説が、今から三十年以上も前の発表であることに注意しなければならない。現在であれば、男色は「地獄」とは言えないだろう。

(7) この赤いランプは暗室で妖しく輝いており、森や春太の欲望を暗示している。

(8) 引用は、安藤始『宿命と永遠―宮本輝の物語―』（おうふう 2003・10）による。

(9) 文庫本の解説者・常磐新平氏は、この点について「この小説の本当の主人公は夢見通りという一個の町である。それはどこにでもあるような町である」と指摘している。ある面ではその通りだと考えられる。

引用は、新潮文庫「夢見通りの人々」（1989・セ）による。

(10) ここには、安藤始氏が言うように、彼らが「この町では他者でしかなく、決して完全にここに溶けこむことができなかった」という面もあるが、春太の場合には、森的なものへの恐れがあり、光子には竜一からの逃走、奈津には隼へのこだわりが強すぎて、〈夢見通り〉からの離脱につながったと考えられる。

引用は、安藤始『宿命と永遠―宮本輝の物語―』（おうふう 2003・10）による。

〔二〇一八・九・二七 受理〕

コントリビューター…町 博光 教授（日本文学科）